

---

「 Streich & Liede 」

綾瀬 徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「 Streich & Liede 「

### 【コード】

N0923W

### 【作者名】

綾瀬 徹

### 【あらすじ】

あの冬の日、校庭に立つあの木の下で君を見つけたのはきつと偶然なんだろう。だけど運命だと信じたい。

君にこうして触れられるのは、君があの場所に居てくれたからだ。

(前書き)

これは今年の一学期に部活用に書いた物語です。

ぜひぜひご覧ください。

初めて彼女と会ったのは、雪が深々と舞い降る灰色の世界の中だった。

若原理仁は、その日部活が終わった静かな時間。

校庭にある古く大きな木の下で、珍しく訪れた1人の時間を満喫していた。

その木は校庭の隅っこにあるため、結構目立つ容姿を持つ理仁でも下校時刻をすぎてる事などお構いなしにゆっくりできた。

「ふわあうっ…!？」

ドサッと、欠伸をした瞬間何かが理仁の顔に落ちてきた。

じっとしているのも冷たかったため、理仁の茶色い頭に乗ってきたそれを払う。

どうやら重さに耐えきれず、木の枝がしなって偶然雪が理仁の上不至于落ちてきたようだ。

幸いにも量は少なく、頭と肩に少し雪が積もっただけで済んだ。

「今日は運が悪いな…。」

「…雪が…。」

上を向いて呟いた時、どこからか声が聞こえた気がした。

近くに誰かいるのだろうかと思い、きょろりと周りを見渡してみ  
るが、周りには人っ子一人、先生すらいなかった。

だが、ボソボソという声は確かに聞こえる。

理仁は後ろをまだ見て居なかった事に気づき、恐る恐る木の後ろ  
に身を乗り出して様子を窺った。

木の後ろには緑のフェンスがあり、その向こうは小さな公園のよ  
うな空間があった。

公園と言っても遊具などは存在せず、ベンチがぼつりとあるだけ  
だったのだが、そのベンチに一組に男女が肩を並べる形で何かを話  
していた。

様子を見てみると、話に夢中で理仁の存在に気づいていない事を  
知り、あの醜態を見られていないことに安堵する。

そのままカップルをじろじろ見ているというのも失礼な気がして、  
乗り出していた体を引っ込めて木の根元に腰を下ろす。

だが、気づいてしまった存在を忘れ去ることなどでできず、聞こえ  
てくるカップルの声を逆に意識してしまい、2人の会話を耳が必要  
以上に拾ってしまう。

( いやいや、盗み聞きなんてよくないって。 )

悪いことだと自分に言い聞かせるものの、今ここで立ちあがってその場を立ち去ると自分の存在が気付かれる恐れがあり、身動きをとることすらできなくなってしまう。

最終的に、理仁は盗み聞きする形になってしまったのだ。

「なんで急に別れるなんて…、理由は何だよ。俺本気で由衣の事が好きなんだ。」

「だって穂希君、私の理想と違うんだもん。」

聞こえてくる会話は、まさかの別れ話という本当に聞いてはいけない部類のものだった。

しかも、彼女の意志は固く、もう別れる事を決意しているような口ぶりである。

「なんだよ、それ…。おまえ、最低だな。」

ざっと音がした瞬間、一つの足音が遠ざかり、そのまま姿を消した。

\*\*\*

夏、理仁は二年生になっていた。去年の冬、今からもうすぐ半年になるのだろうか。

一年生だった理仁が初めてあの木の下に行き、修羅場を目撃した時から、理仁は毎日あそこへ通っている。

理由は、彼女も毎日フェンスの向こうのベンチに座っているから。彼女の名前は麻枝由衣。少し長い黒髪を結ばずそのまま下ろして、とても素直な子。

どうして彼女を知っているかと言うと、半年前から理仁は彼女の相談役となっていた。

半年前、彼氏がその場を後にした後だ。

残された彼女のため息が聞こえた時、どこからか携帯の着信音が聞こえた。

理仁は自分の携帯が鳴ったのかと一瞬驚いたが、携帯は鞆の中で、その鞆は教室にある。

ベンチに座る彼女は、鞆の外ポケットに入っていた携帯を取り出す。

「あんたの思い通り、穂希君とは別れたよ。これで満足？」

キツと、怒りに満ちた静かな声が聞こえた。

敵でも眼のあたりにしているのだろうか。

彼女の怒りと憎しみが声からひしひしと伝わってきた。

「ええ。でも、もう1つ足りないわ。」

何が起きているのか分からなくなっていると、背後でざつという砂を踏む音と同時に、ベンチに座る子とは別の、少し高い大人びた声が理仁の耳に届いた。

「な、なんであんたがここにいるの…!?!」

彼女の、本当に驚いたような声が聞こえ、理仁は好奇心に負けて木の後ろへと身を乗り出した。

そこには、そこまでハデではないが、少し化粧をして綺麗に着飾っている別の女が余裕の笑みで彼女を見つめている。

ベンチに座っていた彼女は、驚きのあまりベンチから立ち上がり固まっている。

立ち上がったその拍子に携帯をとりおとしたのか、地面に携帯が落ちていた。

固まって身動きがとれないでいる彼女に、女は彼女が聞きたかったであろう言葉を先ほどと変わらない余裕の笑みを浮かべながら言った。

「あんたがちゃくんと穂希君と別れるか心配で見に来てたの。」

その後、女はそのまま彼女に話をし続けた、彼女は睨みつけるようにその話を聞いていたが、その顔には次第に悔しさがにじみ出ていた。

それを必死に隠しているようだったが、理仁はそれを見逃さなか

った。

「わかった、そうすれば二度と穂希君に近づかないんだね。」

「ええ、約束する。私は穂希君に興味ないし、あなたが不幸になればそれでいいんだから。」

それだけ言って、女はその場を後にした。

女が捨て台詞としては行って行った言葉の意味を理仁は理解する事が出来なかったが、女が彼女を敵対視しているのは理解が出来た。

彼女は落ち込んだようにベンチに座り、携帯を拾って空を仰いだ。

何かを考えているようで、もしかしたら呆然としているだけだったのかもしれない。

一部始終を見てしまった理仁は、もう日が暮れて居る事に気付いた。

帰るに帰れない雰囲気だったのだが、このまま彼女を置いて帰るのもどうなのかと考えてしまう。

赤の他人のはずなのに、放っておく事が出来ないのが若原理仁という人間だ。

友人にはあきれられるのだが、人をけなす人間より人の役に立ちたいと思うお人よしだった。

だが、出るに出来ないこの状況をどうしたらいいのかと考えて居

ると、突然彼女は立ち上がりベンチに置いていたスクール鞆を手にとった。

その瞬間、少し前かがみになっている彼女と目があつた。

「あ……。」

「……え？」

理仁の存在に気づいてしまった彼女と、彼女に存在を気づかれてしまった理仁は、数秒間の間固まっていた。

その間二人の脳裏では色々な事が流れていた。

「あ、ああああの！申し訳ありません！！」

理仁は、混乱のあまり思わず土下座という行動に出た。

それを見た彼女はとても驚いていたが、行動に出た理仁本人もとても驚いていた。

どうしてここで土下座なのかと、自分の事を心の中でとてもひどい言葉で罵倒していた。

そしてつい自分の言葉で傷ついてしまいながらも、青ざめた顔で理仁は恐る恐る顔をあげて彼女を見上げた。

すると彼女は、涙をいっばいに瞳にためて、理仁にこう言ったのだ。

「盗み見した罰です、私の愚痴を聞いてください。」

彼女は誰でもいいから、感情を思いつきり吐き出せる相手が必要としていたようだった。

その後、理仁は嗚咽の含まれる聞き取り難い声を細かく拾い、彼女の言葉すべてを黙って聞いた。

その後、その公園で理仁と彼女は毎日のように会うようになり、それは半年たった今でも変わらなかった。

変わった事と言えば、彼女が理仁の学校にいるという事だけだった。

\*\*\*

ある日の昼休み、夏の暑さにも負けず理仁は廊下を走り回っていた。

理仁は勉強のランクは普通なのだが、容姿はそこそこで、髪を染めてピアスもしているし制服も着崩しているし、はたから見たらチャライと言われてもおかしくないのだが、女子には結構受けが良かった。

しかも性格がチャライ容姿に似合わずお人よしというギャップあり、落ち込んでいる人には弱い方で、ある意味学校の相談係のようになっていた。

たまに何故か先生に呼び出され、容姿の事で説教されるのかと身構えて居ると先生の相談が始まったりして拍子抜けする事が多々あった。

相談や愚痴だけならまだですが、たまに理由もわからず追いか  
け回されたり個室に引きずり込まれたりするのでそういう場合はつ  
い逃げてしまう。

友人には相談なんか受けるのをやめると言われるのだが、放つて  
おけないのが理仁という人間なのだから仕方ない。

「なぐに1人でたそがれてんの？」

走りまわって疲れたので廊下にある自販機の影で休んでいた理仁  
の真横から、突然声が聞こえた。驚いて横に視線を向けると、間近  
に金髪ピアスの男子生徒の顔があった。

距離的に10センチもなかったかもしれない。

突然現れた人のドアップに心臓が一瞬止まりそうになるほど驚い  
て思いつきりその顔から離れた瞬間、横にあった自動販売機にガタ  
ッと大きな音とともにぶつかつた。

「うわ、何やってんの理仁。やっぱバカなの？そのまま自動販売機  
に頭ぶつけて死ぬの？」

理仁に顔を間近に近付けて居た人物は、あきれたような馬鹿にす  
るような口調だった。

さつきは動揺してよく見えていなかった顔を、今度は落ち着いて  
みるとわざと崩されている制服の下に隠されているネックレスをつ  
けた金髪の少年は見覚えがあった。

「啓く、驚かせんなよ…。つかそんな簡単に死ぬか！」

楽しそうにからかってくる目の前の少年は、理仁の小学校からの親友である邦宮啓だった。

啓とは教室から一緒だったのだが、追いかけているうちに見失ってしまっていた。

どうしてここにいるのか分からなかったが、無事再会できて少しほっとする。

「俺の暴言は愛の証だって言ってるんだろ。それより早く食堂行こうぜ、腹減った。」

「お前の愛は痛いんだよ。」

じゃれるように肩に腕をまわしてくる啓に促され、食堂に向かうと足を進めた時だった。

背後からツンッと誰かに制服の端を引かれる感覚を覚え、足を止めて背後を振り返る。

「ん？」

突然理仁が足を止めたため、啓はなんだよと言いたげに理仁と同じように後ろを振り返る。

そこには見知らぬブロンドの可愛らしい女子生徒が少し上目づかいで理仁を見上げて居た。

「理仁の隠し子？」

「黙れ。君、どうかしたのか？」

「あ、あの。」

もじもじと何か言いた気な様子をみせる女の子をみて、啓はああ、と何かを察したような仕草を見せると、何故か先行くとだけ短く言う。理仁の肩を軽く叩いて先に食堂へ行ってしまった。

残された理仁は啓の行動の意図が掴めず首をかしげたが、それより目の前の少女が気になって視線を戻す。

少しの間うつむいていたその子は、意を決したように顔をあげた。

「好きです!!」

顔を赤らめながら、その子は勢いよく突然理仁に想いを告げてきた。

咄嗟の事で、理仁は頭を真っ白にしたが、その子は真剣な表情をしていた。

「よかったら、私と付き合ってください・・・っ!」

\* \*

理仁は、午後の授業に遅刻した。

「で、最終的にその子に付き合っただけか。理仁って本当に優しいよね。」

理由は告白してきた女の子の告白を断り、泣かれてしまい、その子が泣きやむまでずっとそばに付き添っていた事を啓に話すと、第一声に言われた言葉が今のだった。

しかも満面の笑み。啓の笑みが物語っているのは、怒りだ。

「……、お、怒ってらっしゃいます?」

「まあ、そりゃ〜?」

啓は昔から理仁の親のような存在だった。

心配されて、叱られて。

同じ年齢だと言うのに、小さい頃から理仁は啓に心配されてばかりいる。

親のような存在であり、兄弟も同然の存在だ。

親同士がとても仲が良かったため、小学校から高校生になった今でも晩御飯は一緒に食べて居る。

だが、一人っ子である理仁と啓が寂しい思いをしなかったのは、あきれるほど仲良かった両親のおかげだろう。

小さいころから一緒にいるからか、私生活が悪い理仁を啓が監視しながら説教するという光景は2人の両親は面白いという様にほほ

えましい笑みを浮かべて眺めていたものだ。

「相談と食事、どっちが大事だと思う？」

とても笑顔でそんな事を聞かれ、理仁は啓が今怒っている理由をやっと理解する。

本当は理仁は授業をサボった事を怒っているのだと思っていたのだが、実は昼を食べなかつた事の方が怒る原因だったらしい。

「しよ、食事…です…。」

「わかればいいんだよ。」

叱られた子供のように肩を落とす理仁を見て、もういいだろうと思った啓は説教をせずにその場を終わりにしてくれた。だが代わりに、啓の口から理仁が想像もつかない事が飛び出してきた。

「理仁、好きな子でも出来た？」

「は？」

「俺から見てる限りだけど、今んとこ告白全部断ってるじゃん？」

「そついうわけじゃ…、ないよ。」

少し言葉がおかしくなったのは、喉に何かが詰まったせいだ。

それが何なのか、理仁はわからなかったが、心にとどめる存在をこれ以上作る事はないと理仁は思っている。

あの人を本当に忘れるまで、大切な存在など要らないと決めて居たのだから。

啓は理仁の少し途切れの悪い言葉を聞いて、眉根を寄せた。

その時の理仁のうつむく表情は暗く、夏の青空には似つかわしくないものだった。

\*\*\*

放課後、いつものように理仁が木の裏のフェンスの前に腰を下ろすと、ちょうど由衣がベンチへとやってくるのが見えた。

だが、その様子が少し元気がないように見えた。

「今日元気ないな、どうかした？」

「あのね、…」

理仁の問いかけに、由衣は苦笑を浮かべてぽつぽつと口を開いた。

「実は今日、友達が入学してからずっと好きだった人に告白したの。だけど振られちゃって。でも慰めてくれたんだって。それで惚れ直したって言ってたんだけど。私慰めてるところ見ちゃって。」

その人のことつい…、好きになっちゃったの。」

「なんで好きな人ができたのに落ち込んでんの？」

理仁は思った疑問を口にした。だが、すぐにその答えが浮かんだ。友達と同じ人を好きになったという事は、友達がライバルになるわけで、しかも友達の後に好きになるのだ。

もし由衣とその好きな人が付き合ったら好きな人を取られたと考えられてもおかしくないだろう。

だが、理仁のバカな発言に由衣は悲しそうな苦笑を浮かべるだけで、何も言わなかった。

何か、言えない事情があるのだろうかと考えたのだが、それについて全く予想がつかなかった。

「友達とライバルになっちゃうのもそうなんだけど、それはあんまり気にしてないの。」

「じゃあ、なんで。」

聞くと、由衣はそれだけは秘密だと言って教えてくれなかったのだが、その後の様子はすっかりいつもの由衣に戻っていた。

だが、その日から彼女を見る回数が減った。

前は毎日のようにベンチに座っていたのに、最近はさっぱりだし、学校でも見かける事が少なくなった。

たまに見かけたと思ったらすぐどこかへ行ってしまった。

なんとなく、避けられているように思う。

「最近元気ないな。」

昼休みの教室で、啓は弁当をつつきながら理仁の顔を覗き込んできた。

いきなりの友人のドアップに驚きつつ、理仁はハシが止まっている事に気づく。

「一週間くらいその調子だよな。元気注入でキスでもするか？」

「気持ち悪い事言つなよ、そういうのは女子にしてやれ」

「女子なんてつまらないだろ。そついや最近知り合つた子がさ…、」

窓の外を眺めてぼーっとしている理仁に気づき、啓は途中だった言葉を切った。

今の状況では何を言っても理仁に届かない事を知っているからだ。

それに急ぎの用でもなかったので、理仁が正気になった時に話す事にした。

啓は自分の弁当を食べる事に集中する事にして、心の中で理仁が昼休み終わる前に弁当をすべて食べ終わらなかつたらどんな悪戯をしようか、など本気で考えて居た。

\*\*\*

放課後、ある空き教室の一室で啓と由衣は2人で委員会の作業をしていた。

偶然一緒の委員会で、偶然一緒に作業する事になった先輩と後輩のつながりは、委員会以外で理仁と言う存在だけだった。

「外は運動部が大変そうですね。」

作業中、ちらりと外を見て由衣が呟いた。

夕方と言ってもまだ日は高く、夏の室外はとても熱い。

そのため室内ではすでに冷房が付いている。

外と比べたら当たり前前のことだが教室はとても涼しく感じられるが、運動部熱い環境にあるはグラウンドで汗をかくほどの運動をするのだ。

夏は汗の量が半端ないと思われる。

「ああ、うん。そうだね。」

どこかぼーっとしていた啓は、由衣の言葉に簡単に答えるだけだった。

「理仁先輩は、元気ですか？」

「いや。」

そんな彼も、理仁の名前を出すとすぐに反応を見せる。

最近では由衣から理仁の名前が出ると少し不機嫌になる気さえする。

「私、理仁先輩の事が好きなんです。」

「俺のライバルになるって言いたいのか？上等だけど。」

彼の嘘かほんとか分からないその発言は、もう聞きなれて居た。

思えば初めて啓を認識した時もこうだったと思う。

廊下で偶然理仁を見かけて、ついじつと見つめてしまった時があった。

理仁のいる学校に入学してすぐ、理仁がとても有名人なのだ知った時そんな有名人と知り合ってしまった事に驚いてついまじまじと見てしまったのだ。

その時由衣の視線に気づいた啓がとった行動は、由衣の視界から理仁を隠すことだった。

最初は何をしているのか分からなかったが、噂によると彼はそういう行動や発言が多いらしい。

周りからしたら冗談だと思っっているらしいのだが、由衣は納得しがたい気持ちがあった。

「でもダメだよ、理仁には心に決めてる人がいるんだから。」

「・・・え？」

「その人には、絶対に誰もかなわない。」

最初、啓が嘘を言っているのだと思った。

だが、彼のさみしそうな表情をみた瞬間、冗談で言っているわけではない事が伝わってきた。

その時の自分の表情がどんなものだったかは分からないが、啓の気まずそうな表情により、ショックを受けて居るのがわかるほどには、悲しそうな表情をしてしまっていたに違いないと思う。

\*\*\*

最近、啓の理仁に対する態度がおかしい気がする。

話しかけても気まずそうに視線をそらしたり、言葉を濁したり、たまに頭を抱えて何かを悩んでいた理、いつものように気持ち悪い発言をしない。

この前は逆だったのにと考えて居ると、じーっと啓がこちらを見ている事に気づく。

「なんだよ、どうした？」

「え、あ・・・あのさ」

「若原、呼びだし！」

啓が何かを言いかけた瞬間、クラスの男子が理仁の名前を叫んだ。そのせいで、啓が理仁に何を言おうとしたのか分からず、行ってこいよと笑顔で言われてしまった。

理仁は納得いかなかったが、しぶしぶ廊下へ出た。

廊下に出た理仁を待っていたのは、二週間ぶりに間近で見る由衣の姿だった。

「あ、えっと。お久しぶりです。」

「そうだな…。場所、変えようか。」

理仁はそう言って、由衣を屋上へ連れて行った。

その間由衣はうつむいたまま何も言わない。

由衣の様子に違和感を感じながらも、理仁は気づかないふりをした。

屋上に着いた時、理仁は由衣を日陰に誘導した。

促されるまま由衣は日陰に入り、やんわり微笑んでお礼を言う。

「それで、どうかしたのか？」

理仁の問いかけに、由衣は視線を落とした。

「うん、実はね。私、好きな人に振られるかもしれないんだ。」

「なんで？」

「その人に、好きな人がいるんだって。」

そう言いながら、由衣は地面をけったり床に背を預けたりして、暇を持て余すかのようにしていた。

じっとしていらなくて、動いていないと落ち着かないように、せわしない。

「あきらめんのか？」

理仁は、そんな由衣に聞いた。

だが、彼女は笑顔で首を横に振った。

「ううん、一回告白しようと思って。呼んだの。」

「え？」

「私、理仁先輩が好きです。」

彼女の言葉を聞いた瞬間、理仁は眼を見開き、そしてうつむいた。

由衣は理仁の反応を眼のあたりにして、わかっていたとでも言う様に悲しそうに苦笑を浮かべた。

「先輩が好きです、心に決めた人がいるとしても。」

驚いた理仁の表情を見て、どうして自分は人を傷つけることしかできないのだろうかと心の中でぼつりと考えた。

半年前の冬も、今も、大切な人を傷つけて自分から遠ざけることしか由衣にはできない。

あの女がいなくても、いつか同じ事が起きただろう。

自分から、あの人を遠ざけ、今も告白することで理仁を自分から遠ざけようとしている。

逃げて居るとわかっているのだけれど、怖いのだ。

傷つけるのが、傷つけられるのが。

「俺は……」

うつむいたまま、理仁は口を開いた。

何を言われるのか一瞬不安になりながらも、何を言われても仕方がないと思いき身構え、眼を閉じた。

\*\*\*

「なあなあ、若原また告白かな？」

ざわざわと、理仁が教室を出て行ったあとに教室が騒がしくなっ

た。

男子も女子もつわさが好きで、騒ぐのも好きで。

そんな無神経な言葉を聞くだけで啓は神経を逆撫でられる。

「…っ!？」

一瞬、教室の扉から聞き覚えのある声が聞こえた気がして理仁が向かった扉に視線を向けた。

教室の外では、由衣と理仁が久しぶりの再会を果たしていた。

その光景を見て、瞬間あの女はとうとう告白を決意したのか、と心の片隅で考えた。

逃げるのか突き進むのか分からないが、これでもう理仁が自分のもとへは帰ってこないと思った。

少なからず、理仁は由衣に惹かれていたからだ。

理仁が想ってやまない人、その人は彼が中学のときに出会った。

中学一年で恋に落ち、三年のときに告白したが、想い届かなかった。

理由は、理仁の想い人が教師だったから。

その人は啓たちが高校へあがると同時に結婚退職した。

別に理仁の心にいる人は死んだわけではないから、かなわないわけではない。

ただ悔しくていじわるしただけだ。

啓の唯一の親友をとるのだから、いじめたっていいじゃないか。

「熱いな…」

眩しすぎる空と太陽に視線を向け、眉を寄せて呟いた。

\*\*\*

「別に俺には心に決めた人なんていないよ？」

「え？」

一瞬とても間抜けな顔をした気がする。

案の定、ブッと理仁は大声で笑い出した。

「え、だって。啓先輩が…。そんなに笑わないですよ！」

由衣の言葉に、大笑いしていた理仁は痛くなったお腹を押さえて涙を浮かべてながらごめんと説得力の無い言葉を繰り返した。

「啓が心に決めた人がいるって？確かに前は居たけど、今はそうだな。お前でもいいや。」

「ええ！？」

理仁の笑顔で、由衣はへたりと床に座り込んだ。腰が抜けた由衣に、理仁は手を差し伸べ立ち上がらせる。

「わっ!？」

由衣はその手を取った瞬間理仁に抱きしめられた。

理仁は、腕の中の由衣が顔を真っ赤にして硬直している事に気づき、やっぱり可愛い生き物だなと思いつながらまた少し強く彼女を抱きしめた。

「これからよろしく、由衣。」

「は、はい……。」

理仁の言葉に安心して、由衣は理仁に体を預けた。

\*\*\*

「啓?どうした?」

「なんでも。」

教室に戻ってきた理仁は、啓の様子が少しおかしい気がした。

声を掛けても少し反応が悪い。

「理仁、今日ゲーセンなしな。」

「何で？行くに決まってるじゃん。啓と行かないきゃ楽しくないし。」

啓は、理仁の言葉を聞いてぽかんと開いた口がふさがらずにいた。

そんな啓の表情を見て、理仁は首をかしげている。

それを見て、啓は理仁という人間を忘れて居た様な気がした。

理仁が啓から離れるだなんて考えた事が恥ずかしくなった。

そして心の中で、やっぱり癪に障るから気が済むまで由衣の邪魔してやるうと、今後の悪戯を生きよううと本気で考えるのだった

…。

\*\*\* END \*\*\*

(後書き)

いかがだったでしょうか！

この物語を読んで、少しでも心が温まっていたただけなら光栄です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0923w/>

---

「 Streich & Liede 」

2011年8月28日07時26分発行